

古賀智敏先生への追悼文

石井 明

横浜商科大学元教授

■はじめに

会計研究関係の諸学会および会計・監査の実務界等を牽引してこられた古賀智敏先生は、石川県白山市（金沢市の近く）にある、当時奉職先であった金城大学の経営学・会計学等の講義二年目に出講された後、入院され、2025年5月5日、帰らぬ人となりました。

5月6日、一切の前触れもなく、先生の急逝は伝えられ、9日、私は兵庫県西宮市で行われた告別式に参列しました。先生とは昨年11月金沢市で会食、また年末に先生が先導された出版企画のことで東京でお会いし、また今年に入ってから4月1日、会計論文に関する事で私は先生に電話を差し上げて数分間相談をしたのですが、それが先生との最後の意思疎通の機会となろうとは思いませんでした。

振り返ってみますと、先生からは1999年9月に開かれた日本会計研究学会全国大会の日（後述される）からこの度の逝去まで約26年間にわたって種々の示唆を頂き、またこの10年間程では時に率直に意見を申し上げたりしてご交誼頂いてきたわけですが、突然お別れすることになってしまいました。

■古賀智敏先生のご経歴

東京銀行（現・三菱UFJ銀行）時代、実務的な経験や会計や財務分析に関する本の執筆はあったとはいえ、私は48歳に達して初めて日本会計研究学会に入会、研究業績も僅かな研究者が古賀先生をご紹介するのは幾分身の程知らずではありますが、本追悼文を進める前提として、先生のご経歴を以下簡潔に述べておきます。

先生は1971年3月に山口大学経済学部を卒業後、1973年3月に神戸大学大学院経営学研究科修士課程を修了された。その後、アメリカに渡り1976年8月にイリノイ大学経営大学院会計学修士を修了、日商岩井アメリカのシカゴ支店勤務後、ニューヨークにある監査法人（二法人）の監査部門・税務部門勤務を経験されました。神戸大学大学院では武田隆二先生のご指導の下にあり、武田先生から研究者としての強い期待を受けてアメリカより古賀先生は帰国され、まず1982年4月に龍谷大学の助手に就かれました。その後古賀先生は短期間で教授に昇進、そして1992年4月に神戸大学経営学部の国際会計論の教授に移籍・就任されたのでした。さらに先生は、神戸大学の学部・大学院、および諸学会において蓄積した知見や指導力を発揮され、そしてその後も同志社大学、東海学園大学、近時に金城大学へ移籍、継続して会計関係学会等での圧倒的な活躍の様や存在感を示しておられました。

古賀先生が挙げてきた業績はほぼ全て先端的であり、かつ広範囲に及んでいたと言っても過言ではないと思います。先生の研究実績の評価については、日本会計研究学会等の研究理事の就任期間が長期にわたった点からも自明でありましょう。

以下ここに綴る内容については、私が古賀先生との関係において会計諸学会での活動で経験させて貰った4つの事柄について述べたものですが、これらのエピソードを通じて、古賀先生の学問に対する極めてアグレッシブな姿勢や人となりを明確に刻みたく考えるものです。

■日本会計研究学会大会

古賀智敏先生の聲咳に接することができたのは、私が東京銀行の関係会社に勤務せるなか、幾つかの会計諸学会に入会し始めて約2年が経過した、私が50歳の頃に参加した日本会計研究学会でした。

1999年9月、京都学園大学（現・京都先端科学大学）で開かれた日本会計研究学会の第58回全国大会

に私は参加致しました。大会の初日、参加者のひとり、横浜国立大学・岡田依里先生（若杉明教授が主宰する企業会計研究会で懇意となる）から古賀先生を紹介して頂き、そして第三日目・四日目には、統一論題・第二会場「時価主義会計・監査の系譜と二十一世紀への期待」という部門の会場に向かいました。討論会場の座長は白鳥庄之助先生（成城大学）でした。同座長の下、古賀先生は「金融商品と公正価値会計」というテーマで、金融経済の発展と評価技法の進歩を背景として、金融商品、特にデリバティブの公正価値評価に焦点をあてた報告をされました。それと同時に、その基底にある会計の論理を明快に説明し資産・負債アプローチによる近い将来の会計構造転換の必然性を明確に位置づけるものでした。因みに、大会会場には、古賀先生のほかの報告者（登壇者）として、小宮山賢（朝日監査法人）、弥永真生（筑波大学）、笠井昭次（慶応義塾大学）の諸先生がおられ、当時の金融商品会計の先端的課題を研究し一定の成果を出された意欲満々の研究者の方々でした。

何故、その会場に私がいたのかですが、私は東銀リサーチインターナショナルという東銀の関係会社に数年前より在籍しており、為替予約、スワップ・オプション等のデリバティブ金融商品に関する公開講座や税務当局への出講を自らの業務としており、デリバティブ会計をどう説明すべきか、その会計理論に大いに興味を抱いていたからでした。そして、1998年頃でしたが、時価会計に関する、先駆的会計理論の本を探したところ、古賀先生が執筆された本、『デリバティブ会計』（森山書店）が目にとまり購入。玩読後、取得原価主義会計を前提とした当時の監査は、将来どのように変革されるべきなのか、という問題に関心が及びました。それに的確に答えるような研究書を探したところ、同じく古賀先生が書かれた『情報監査論』（同文館出版）が公刊されているのが分かり全く驚いたのです。即刻その本も購入し読んでみて私は、古賀先生が会計および監査の二領域を隈なく考究している、一頭地を抜く研究者であろうと心底から感じたのでした。

私としては、実のところ1994年、海外駐在期間中に関節リウマチに罹ったことを契機として、一介の銀行員から大学の教師を目指すことを決め、改めて会計研究に心血を注ぎ出し学会入会を重ねてきたなか、会計研究学会の全国大会・統一論題の場に出席できたことは、私にとっては記念すべき好機でありました。満座の会場のなかで私は、古賀先生に対して私自身が長い間抱いていた時価会計やその監査に係る疑問点を何の躊躇もなく質問票に書いて出したのでした。

その質疑応答の際、細かなことになりましたが、白鳥座長は私の質問を朝日監査法人（当時）の小宮山先生に振ろうとしたのでした。が、私はこの質問は『情報監査論』の執筆者である古賀先生に対して出したものであり、「是非とも古賀先生のご意見を伺いたい」という言葉が自然と口をついて出てきたのでした。

学会が終了して大分月日が過ぎた頃、森山書店から郵便が来て、雑誌『会計』に関する統一論題に係る自分自身の発言記録の添削（校正）の依頼がありました。私はこの時古賀先生との質疑内容を思い返して、二度目の感激を覚えたことは今でもよく覚えていることです。

■学会スタディ・グループ

古賀先生は先の全国大会以降、いろいろな分野の研究にも着手され、神戸大学の研究仲間などを中心として共同研究に取り組みられ研究成果を続々と公表されました。例えば、近年では「統合報告」のような先端領域を早い段階で真正面から取り組み、全体像を示すと同時に、論点を噛み砕いて報告することを成し遂げている古賀先生の姿がありました。まさに破竹の勢いの「古賀先生の存在感」に圧倒されたことを思い出します。

そのような研究活動状況の下、私にとって印象的であったのは、米国財務会計基準審議会（FASB）が公表した調査報告書『デリバティブ会計とヘッジ戦略』（川崎照行先生共訳・東洋経済新報社、2000年）の上梓でした。私は勤務先の公開講座でのデリバティブ会計に関する解説の仕事があつて、既にその原書を購

入し自力で翻訳に励んでいたのです。その古賀・川崎先生による翻訳本の訳とその時点までの自分の訳を比較して、実のところ、私は自らの訳文に生意気にも自負心を持ったことを記憶しています。

加えて、日本会計研究学会の古賀先生が主導したスタディ・グループに基づく報告書『各国におけるデリバティブの会計・監査及び課税制度に関する総合研究』（2003年）が圧巻でした。2001年であったと思いますが、先生は大阪学院大学で開かれた学会での研究報告に先立ち、その直前にファックスでの資料送付及び電話連絡が私にあって、当日質問せよとの依頼でした。これには正直驚き緊張して、時価評価に関してキーとなるであろうと思われる事項を訊くことに決めました。当日、一番に手を挙げて質問。私の質問が予想外であったようで回答者がいないという状況となり、古賀先生が自らの意見を開陳されました。大会終了時、私がロビーに居たところ、古賀先生が私を見つけて「良かった。ありがとう」と笑顔で声を掛けて貰ったことが心胆に刻まれ、私はその後の学会活動に大いに気合が入ることになったのです。

■国際会計基準

翻訳案件は原書の執筆者が高名であることがまずポイントとなると思いますが、また出版事情もあるので出版社との深い関係を有する、著名な先生との共訳が必要不可欠である。

早稲田大学の川村義則先生とは、京都学園大学の全国大会で初めてお会いして以来、私は2000年頃より、故新井清光教授が始められた早稲田大企業会計研究会に参加し、また同学部に勤務していた広瀬義州教授（2016年逝去、大学学部語学同クラス）他との因縁もあって、川村先生とはかなり懇意となっていたのです。私の横浜国大の博士号取得が見込まれるに至った2006年5月において、私は二人で監訳の原本を選び出す旨を予め打診した。8月、同志社大学で開かれた国際会計研究学会大会の場で、国際会計基準に係る本、George J. Benston, Michael Bromwichら計4人による共著、“Worldwide Financial Reporting”(2006)を選定、川村先生経由で中央経済社に翻訳案件を持ち込んだのです。これは3カ月後に翻訳権の取得が決定し、その後、2009年の春に『グローバル財務報告』（中央経済社）として首尾よく発刊するに至ったのです。

次いで、古賀先生との関係で、アグレッシブにもう一冊の同種翻訳プロジェクトに着手することになりました。川村先生との翻訳案件成立から数か月後、丸の内にあった丸善書店本店の外書コーナーにおいてオーストラリアにある Monash University に奉職している学者 Godfrey & Chalmers が編纂する “Globalisation of Accounting Standards” (2007) を発見したのです。一読すると、その本は欧州主要国に加えて、アジア諸国他で適用される国際会計基準に関する世界規模で国を代表するような学者の論文を集めたもので、日本からは古賀先生が論文を寄せておられました。先生は執筆者の一人であることから、本全体に対する翻訳を編集者に申し入れ、既に翻訳権を取得済みであろうと私は推察し、その翻訳の一角に入れて貰えまいかと考えて、私は古賀先生宅に電話を入れたのです。ちょうど先生は自宅におられ、即刻、翻訳を一緒に手掛けようかと私に申し出られたのです。

電話から約1週間後、新大阪駅の近くのワシントン・ホテルのロビーでお会いし、先生と翻訳出版を請け負う出版社を決めることになり、これは古賀先生が懇意にされている同文館出版に頼むことになった。古賀先生からは、後日、五十嵐則夫教授（横浜国大）も監訳者の一人となることを告げられた。古賀先生の神戸大学門下生や早稲田大学出身の福島隆先生（明海大学）などの人たちを訳者として選抜し私がほとんどの部分の監訳を務めることにした。

キックオフ・ミーティングは神戸大学の東京六甲クラブ（有楽町）の場所を使い、私が作成したレジュメに基づいて実施。そこに、古賀先生の方針や補足の話が加えられて、検討会は約2時間にわたって行われた。参加者は翻訳予定者の5名ほどであったと思う。翻訳者が京都や名古屋にもいたために私が夏季休暇時に

各地を回って疑問点や修正点の確認を行った。そして2008年、神戸大学において古賀先生の門下生二人の助力を得て最終的な訳文チェックを実施した。この監訳には、日本にいる中国人学者および留学生（当時院生）が翻訳した日本語があったことが印象的であった。この案件は古賀智敏監修、『会計基準のグローバル化』（同文館出版）という本名にて2009年に出版された。

■国際会計研究学会

学会活動は普通3年毎に行なわれる学会の選挙で選出される会長および理事等によって運営される。私が上武大学に奉職していた2011年の夏、学会の知己、吉岡正道先生（東京理科大）から突然手紙が来て、私を推薦する人が結構いるので、一緒に立候補しないかという誘いを受けた。それまで私は研究専一方針で、学会の運営側の職務には興味も野心もなかったが、当時、会計関係の学会には6団体、10年以上在籍、学会報告は10回程実施、また国際会計基準に関する翻訳書（前述の監訳書）も上梓し、また民間企業（銀行）での実務経験のある私が貢献できる部分もあるだろう、また今回は敬愛する古賀先生が会長に立候補されることを既に聞いていたので、誘いに応じて理事に立候補することにした。結果は国際会計研究学会（会員数約500名）の選挙で、古賀先生は順当に会長に選出され、また私は幸い初めての理事に選出されることになった。先生とともに会計研究の発展に尽くすことができると思うと大きな喜びを感じた。

その後、何回目かの理事会の懇親会かの時に、次年度に開催する東日本部会の大会の委員長に私を指名するという話が来た。しかし当時私が所属していた上武大学は、首都圏から離れた群馬県に所在する地方大学であり、また学会員は私だけ、補助・案内ができる学生は数人の見込みという理由で、首都圏にある大学にして欲しいという返事をした。しかし、数か月後、他校での開催受け入れが難しいとして、古賀先生等から再度の要請があり、菊谷正人（当時、国土館大学）理事から自校の大学院にいる弟子数名を上武大学に派遣するという確約を得たことから受け入れたのであった。しかし、本務校の庶務係からの支援はほぼなく、大学から離れた場所での懇親会場の決定からバス手配等の全てのことに孤軍奮闘することになった。さらに研究大会の司会および論文コメンテーターを私が担当、加えて、終了後の懇親会の司会も担当することになった。大会懇親会の乾杯の音頭については、伊東市にお住いの中島省吾先生（日本会計研究学会および国際会計研究学会名誉会長、国際基督教大学名誉教授、当時90歳）に電話を差し上げ、ご快諾を得て大会会場のある高崎市にホテルの手配をした。

2011年9月に開催された大会前夜、中島先生、古賀会長、島永和幸先生（神戸学院大学）と宿泊ホテルの近傍にあった居酒屋で夕食をご一緒した。古賀先生や私から中島先生に幾つかお話を伺ったところ、アメリカのペンシルヴェニア大学留学での研鑽のご様子、およびPaton & Littleton共著『会社会計基準序説』（原書1940年）の翻訳は同大学で師事したRufus Wixon教授（Patonの弟子の一人）に先生が申し出られたことを拝聴した。

研究大会は40名ほどの参加者を得て終了し、その後手配した送迎バスで懇親会場に送り届けて貰い、そして予定通りに中島先生に乾杯の音頭を取って貰った。よって何とか不手際もなく研究大会は終了することとなった。そして復路のJR高崎線では、大会進行のために大学内でも種々ご案内頂いた依田俊伸先生（法政大学）と菊谷先生とともに車中ボックス席で安堵の中で交わした「感想戦」そして、大会前日での中島先生との懇談の光景は、今日まで脳裏に強く残っている。

■近年の交流

近年の出来事としては、2018年3月、私が上武大学から移籍後の大学、横浜商科大学における私の最終講義に古賀先生にご出席いただき先生に過分なスピーチを頂いたことは大変有難く極めて印象深い。

その後は、私の長年にわたる関節リウマチによる膝関節手術を受けたり、また近年ではコロナ禍があって、

会計研究が停滞したりで、電話で話をする以外はお目にかかる機会があまりないままであったが、2023年の年末、拙稿『鉄道リース会計における資本化の考察—20世紀前半期に創造されたリース資本化論—』（2023年）という小稿の抜刷冊子をお送りしたことから、直ぐに古賀先生からの電話を頂き、2024年9月名古屋大学で開催された、グローバル会計学会の記念講演として「リース会計史研究への道」（グローバル会計研究第6号掲載）を拙いながらも披歴することができた。その大会の前日、古賀先生と久しぶりの再会を果たしたのであった。

だが、巨星墜つ。碩学で開拓魂に溢れ常に研究に一步先行を果たしてきた「壮心已まない」古賀先生が学者の営みの只中において他界されてしまわれた。

先生のご生前のご功績や人となりについて私なりの印象を最後に述べることにしたい。先生は学識が豊かであることは遍く知るところであるが、アメリカでの約5年にわたる修業や実務経験がまず基礎にある。加えて、先生は研究意欲が並外れて高く、直接の同門研究者だけでなく、周りの研究者や実務家に対して大いに奮起を促すとともに、新たな知識の吸収が頗る早くできる人であった。先生の高潔な人格、未踏分野に対する強い挑戦意欲、およびその鋼のような実行力、さらに学者をはじめとしたいろいろな人たちに対する指導力や影響力は、古賀先生生来のものであったように私は思うところである。そのような古賀先生の薫習の下で、私の学会活動は順調に、また全く自然に速力を増していった。深謝とともにご冥福を祈るしかない。

合掌

令和七年六月二十日 東京世田谷にて



国際会計研究学会大会。故人となられた古賀会長（左）と筆者。2011年、東京理科大学久喜キャンパスにて。